

書評

「石油の呪い」は祓えるか？

福田 幸正
客員研究員
(公財) 国際通貨研究所

マイケル・L・ロス、2017年、「石油の呪い：国家の発展経路はいかに決定されるか」、吉田書店、松尾昌樹・浜中新吾 共訳

(Michael L. Ross, *The Oil Curse: How Petroleum Wealth Shapes the Development of Nations*, 2012, Princeton University Press)

石油を自国内で産出することができれば、そうでない国に比べると優位なはずだ。しかし、実際には多くの途上国の産油国では特殊な政治的、経済的、社会的問題が生じる。本著はこれを「石油の呪い」と呼んでその仕組みを突き詰めて説明している（米国、カナダ、ノルウェーのように石油生産が開始された時点ですでに先進国であった国々は「石油の呪い」に苛まれていない）。そのために計量分析を用いて客観的な根拠に基づいて原因を追究しているところが本著の特徴と評価されており、次のような途上国産油国の特徴と言われている問題に対して、それぞれ答えを示している。

なぜ、石油に依存すると独裁体制が長期化するのか？

- 石油収入の性質による：莫大、非税収入、不安定、隠匿性

なぜ、石油の富が女性の地位向上を阻むのか？

- オランダ病⇒輸出産業衰退⇒女性労働力需要減少⇒女性の政治的
- 政府からの配分増加⇒賃労働を求める女性減少 ⇒ 影響力の減少

どのようなかたちで、石油は内戦を引き起こすか？

- 石油を支配する中央政府に対する石油産出地域の住民の分離主義運動
- 石油を支配する中央政府の転覆、権力奪取を図る反乱

なぜ、石油は目覚ましい経済成長をもたらさないのか？

- 女性の雇用創出の失敗⇒人口増加⇒一人当たり国民所得の低迷
- 大規模かつ不安定な石油収入を御す財政政策の難しさ

現在、産油国は、より貧しい国々に拡大しており、「石油の呪い」が貧困国を中心にグローバルに蔓延していくことに対して警鐘を鳴らし、産油途上国に対してさまざまな処方箋を示している。また、「石油の呪いは石油消費国で始まる。なぜなら、石油産出国を潤す資金は消費国からもたらされるからだ」(p.301)とし、石油消費国にもできることとして、採取産業透明性イニシアティブ (Extractive Industries Transparency Initiative : EITI) 採取産業から資源産出国政府への資金の流れの透明性を高めること

を通じて責任ある資源開発を促進する国際的な枠組み)の推進や、エネルギー関連会社から石油産油国政府への支払い情報の公開を図るために国際会計基準を改定していくことなどをあげている。

本著本体にはエネルギー輸入大国である日本に対する言及は一切ないが、資源がないがゆえに汗を流さざるをえない日本に対して、つぎのように日本語版への序文(2016年7月1日)を締めくくっている。

「金銭のみが経済的、社会的、文化的近代化を促すものではない。というのが本書『石油の呪い』の重大なメッセージの一つである。石油の発見はサウジアラビアやベネズエラ、イラクなどの国を金銭で潤したが、発展をもたらすことはなかった。近代的な経済と社会開発は工業化や教育、技術革新によってこそたらされる。これは日本人によって開拓された苦難の道であるが、これこそが繁栄への新しい希望をもたらす道である。」(p.7)。産油国にも優れた人材はいる。しかし、その能力が石油収入のやり繰りに使われるばかりとすれば、もったいない話だ。日本のように資源が乏しいということは幸いなるかな、ということだろうか。

なお、見落とされがちだが、脚注にある次の指摘が興味深い。「他の非税収入、例えば外国からの財政支援は、とくにそれが規模や隠匿性、不安定性において石油収入と同等であるなら、おそらくは石油収入と同等の効果を持つだろう」(p.304 注6)。途上国援助も資源であり石油と重なる特性があるのなら、援助は無尽蔵に捻出可能なだけに、「援助の呪い」はより深刻なのだろう。看過できない指摘だ。

前述の産油途上国に対するさまざまな処方箋の一つに、安定化基金が提案されていたが、まさに絵にかいたような「石油の呪い」をかけられた国、ナイジェリアで、安定化基金の創設や財政責任法を成立させるなど、不可能と言われた改革を成し遂げたンコジ・オコンジョ＝イウェアラ財務大臣の活躍について本著で言及がないのは残念。イウェアラ女史の自伝 *Reforming the Unreformable: Lessons from Nigeria*, The MIT Press¹の出版年を見ると、本著の原典の出版年と同じ2012年なので、読まれていない可能性はある。

¹ 書評 <http://www.sridonline.org/j/doc/j201308s07a02.pdf#zoom=100> SRID ジャーナル第5号(2013.8)